

くりまっこ

元気いっぱい 笑顔あふれる 栗真の子



「希望に満ちた それぞれの輝く未来へ」 旅立ちます！

令和6年3月19日、いよいよ卒業の日。卒業を迎える6年生の子どもたちにとっては、一生に一度しか味わえない小学校での卒業式。そして、私たち教職員にとっても、今年卒業する栗真の14名の子どもたちをお祝いできるのは、今回限り。このような貴重な時間をみんなで過ごし、子どもたちの卒業をお祝いすることができたこと、大変嬉しく感じました。そして、巣立ちゆく子どもたちの表情を見ると、嬉しくもあり、寂しくもありという気持ちでしたが、無事に卒業式を終えることができたことは、大変喜ばしく思いました。

卒業したとはいえ、栗真小学校は、子どもたちにとって、唯一の母校です。顔を合わせる機会も度々あると思います。そんな時、私たち教職員は、声を掛けたり、話を聞いたり、温かく出迎えたいと思っています。

卒業生の皆さん、「希望に満ちた それぞれの輝く未来へ」 旅立ちましょう！



卒業証書授与式での「学校長式辞」の一節から・・・

さて、皆さんは、毎年12月30日に開催されている、全日本大学女子選抜駅伝、通称「富士山女子駅伝」を知っていますか。3か月前に開催された、この富士山女子駅伝の2区の区間で、総合19位から、何と12人抜き之力走で7位まで順位を上げた選手がいます。玉川大学の山田桃愛（ももあ）選手です。山田選手は、レース後に、「全体で5位まで順位を上げたかったので、結構、悔しいです」と語っていましたが、その表情には、悔しさとともに、駅伝を走ることができたという喜びが溢れていました。

小学校2年生で陸上を始めた山田選手でしたが、小学校6年生の9月、突然の高熱が続いたため、病院に診てもらいました。診断された病名は、慢性の骨髄性白血病でした。緊急に入院し、4か月間の車椅子生活が始まりました。そして、中学1年生の秋までの1年間、走ることはできませんでした。

そんな時に、山田選手は、ある想いに気付きます。

「あと少し病気に気付くのが遅かったら、骨がつぶれてしまい、もう走ることができなかったかもしれない。走れない期間があったことで、また走りたいという気持ちが強くなりました」

山田選手は、「また走りたい」という想いを、白血病を治療するモチベーションとし、運動を始めました。中学校、高校では、治療を続けながら、バスケット部や陸上部で運動を続けました。大学は、小学校2年生からの夢だった先生を目指して、教育学部のある玉川大学に入学しました。そして、「自分の限界が、どこにあるか知りたい」と思い、女子駅伝のチームに入りました。

治療を続けていた白血病は、7年目の大学1年生の夏には、かなりよくなったため、今まで休ませていた体を、いかに目覚めさせるかという必死のトレーニングが始まりました。そしてついに、大学3年生の時に、憧れの駅伝メンバーに選ばれることになったのです。

しかし、3000m 障害のレースに出場していた時に転倒し、骨折してしまいます。そんな時、山田選手は、かなり落ち込んだそうで、

「骨折して駅伝メンバーから外れて、目標も失って、何をしたらいいのか分からなくなりました。・・・ もう陸上は辞めようかなと思いました」

と語っています。それでも、「ここが私の限界ではない」と強く思い、悔しさをバネに成長していきます。そして、骨折から1年後、再び出場した3000m障害のレースで優勝し、日本一の栄冠を手に入れます。

そして、1年越しの富士山女子駅伝。それはまた、白血病と診断された小学6年生のときから、ちょうど10年が経っていました。

山田選手は、飛躍した1年を振り返り、次のように語っています。

「車椅子からスタートして、大学の最後の最後に結果を出せるようになりました。結果論かもしれないし、私は結果を出せたから言えるのかもかもしれませんが、あきらめなければ、少しは自分を認められるのかなって思います。だから、病気をしている人には、『あきらめずに一緒に頑張ろう』ってお伝えしたいです」

さらに、山田選手は、「まだ自分の限界はここじゃないと思えたので、これから先も挑戦していきたい」と、大学を卒業したあとも、陸上競技を続けることを決めたそうです。

白血病と診断されてからの10年間、山田選手には、数多くの葛藤があったはずですが、それでも、自分に限界をつくらず、前向きに挑戦してきました。どれだけ努力を続けても、決して満足のいく結果がいつも得られるとは限りませんが、誰よりも大きな成長があったことは確実です。そのことが自信につながり、その自信が、未来への挑戦の原動力となっています。

新たなスタートラインに立とうとしている皆さん。山田選手のように、自分に限界をつくらず、前向きに挑戦してください。努力をすれば、誰にでも、必ず成長は保障されます。行動へと駆り立てる気持ちをいつも忘れずに、そして、自分という人間に誇りを持てる生き方をしてほしいと願っています。

